

名古屋まつり協賛

日本古武道大会

日時・場所

令和4年10月15日（土）

熱田神宮神楽殿前広場 10:40～12:10

熱田神宮文化殿講堂 10:30～15:30

(駐車場はございませんので、公共交通機関をご利用ください。)

主催 日本古武道振興会

目 次

I 挨拶

名古屋まつり協進会 会長	河村たかし	1
日本古武道振興会 会長	加藤 紘	2
日本古武道振興会 副会長 愛知県支部長	柳生耕一 巖信	3

II プログラム・演武者名簿（演武順）

<熱田神宮神楽殿前広場> 10:40~12:10

1. 小笠原流弓馬術礼法・墓目の儀及び、百々手式	4
--------------------------	---

<熱田神宮文化殿講堂> 10:30~15:30

1. 柳生制剛流抜刀	5
2. 合気道	5
3. 鞍馬流剣術	5
4. 示現流兵法剣術	5
5. 天真正伝香取神道流	5
6. 立身流	5
7. 神道無念流剣術	6
8. 神道夢想流杖道	6
9. 無想神傳流抜刀術	6
10. 双水執流小具足腰之廻組討	6
11. 宝蔵院流高田派槍術	6
12. 小笠原流弓馬術礼法・騎射の型	6
13. 天道流なぎなた	6
14. 無雙神傳英信流抜刀兵法	7
15. 尾張貫流槍術・柳生新陰流兵法	7
16. 澁川一流柔術	7
17. 柳生心眼流體術	7
18. 神道夢想流杖術及併伝武術	7
19. 新陰流居合術	7
20. 琉球古武術	8
21. 心形刀流剣術	8
22. 関口流抜刀術	8
23. 柳生新陰流兵法	8

III 流派紹介 (あいうえお順)

1. 合気道	9
2. 小笠原流弓馬術礼法・墓目の儀及び、百々手式	9
3. 小笠原流弓馬術礼法・騎射の型	9
4. 尾張貫流槍術・柳生新陰流兵法	10
5. 鹿島新當流劍術	10
6. 鞍馬流劍術	10
7. 示現流兵法劍術	11
8. 澁川一流柔術	11
9. 新陰流居合術	12
10. 心形刀流劍術	13
11. 神道夢想流杖術及併伝武術	13
12. 神道夢想流杖道	13
13. 神道無念流劍術	14
14. 関口流抜刀術	14
15. 双水執流小具足腰之廻組討	15
16. 竹内流腰廻小具足	15
17. 立身流	16
18. 天真正伝香取神道流	16
19. 天神真楊流柔術	17
20. 天道流なぎなた	17
21. 宝蔵院流高田派槍術	17
22. 無雙神傳英信流抜刀兵法	18
23. 無想神傳流抜刀術	18
24. 柳生新陰流兵法	19
25. 柳生心眼流體術	19
26. 柳生制剛流抜刀	20
27. 琉球古武術	20

IV 道場及び教場所在地一覧	21
----------------	----

祝 辞

名古屋まつり協賛第61回「日本古武道大会」の開催、誠におめでとうございます。
本大会がこのように開催されることを大変うれしく思います。

さて、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、全国的に多くのイベントの中止が余儀なくされました。昨年、一昨年と開催予定であった第59回大会、第60回大会も例外ではなく、残念な思いをされた方が大勢いらっしゃったことと思います。今回の第61回大会は、参加人数の制限や、マスクを着用しながらの演武といった例年とは違った形での開催と伺っています。本日お集まりの皆さまにおかれましては、感染症対策にご協力いただき、感謝を申し上げます。

感染症の拡大という、これまで経験したことがない状況の中で、本大会をこのように開催することができたのは、日本古武道振興会並びに関係の皆さまが日ごろから伝統武道の保存・発展にご尽力によるものと存じます。古武道は、平安末期から鎌倉、室町時代にかけて生まれて以来、時代の変革を乗り越え、今日までの長い間、その技と心が伝承されてきました。伝統と共に受け継がれてきた「信義・礼節・友愛」といった日本古来の精神文化は、このコロナの時代を乗り越えていく力になると強く感じています。

本日は各流派の皆さまが、長い年月の中で磨きあげられてきた、熱い演武を繰り広げられることを期待します。また市民の皆さまには、本大会を通じて、日本に古来より伝承されてきた技と心を感じていただきたいと思います。

本大会のご成功と貴会の今後ますますのご発展並びに本日お集まりの皆さまのご活躍とご健勝を祈念いたします。

令和4年10月15日

名古屋まつり協進會会長
名古屋市長 河村 たかし

ご 挨拶

このたび、名古屋まつり協賛第61回熱田神宮奉納日本古武道大会が開催されますことは、日本の誇るべき古武道文化財の保存振興のため誠に喜ばしきかぎりであります。

今日まで数百年の長きにわたり綿々と伝えられてきた古武道は、古人が戦場で生と死を賭けた戦いの中で習得した実戦武術であります。それが武士の誉れの信条であります。仁、義、礼、智、信とともに様式美さえ醸成され、日本の誇るべき伝統文化財の一つとなったものであります。そしてこの古武道は歌舞伎、演劇、映画、文学、美術などの日本文化に大きな貢献をしており日本語にまで影響を及ぼしております。まさに時空を超えた日本の表象文化と言えるものであります。

この古武道に魅力を感じた外国人も最近多くなり、各流派に多数入門し修行しております。

日本古武道振興会はこの貴重な文化資産である古武道の保存振興を目的として発足し、毎年各地で古武道大会を開催するとともに、さらに我が国における醇風美俗の維持啓発、青少年健全育成、体力増進などを掲げ活動し、今年創立87周年を迎えております。

本日の大会は、日本古武道の保存、振興の見地から、真に有意義であり、それぞれ由緒ある流儀を承継がれ、その道を極められた先生方によって演武されます。ご観覧の皆様におかれては、古武道の素晴らしさを認めてくだされば誠に幸甚と存じます。

日本古武道振興会

会長 加藤 紘

ご 挨拶

第61回「日本古武道大会」が、名古屋まつり協賛の行事として行われますことにあたり、一言ご挨拶申し上げます。

ご承知のように、古武道は生命を懸けた戦いの中から相手を倒す必勝の技術を工夫して体得したことから始まりました。刀、槍、弓、杖、棒、体等を使用した武術にそれぞれ名人、達人が輩出されて、室町時代末期には各流派が誕生しました。その後、時代の変遷に伴い、徳川時代になると古武道は実戦的な技術の習練のみではなく、むしろ人間的な完成を目指す自己修養の道として、特に武士の表芸である欠かせない教養として尊重されるに至りました。古武道こそ武士が生み出した武家文化の精髓であると言えるものであります

剣を学ぶについて柳生兵庫助利厳は「三摩之位」という教えを残しております。則ち、祖師・先哲の正しい教えを、千鍛万錬の稽古を通し、工夫して自分の血肉とすることを表す、「習、稽古、工夫」であります。また、柳生石舟斎宗厳は柳生家憲の中で「昨日の我に今日は勝つべし」と、日々自分自身を向上させるように努力せよと訓示しております。

今日、ここに各流派の代表の方々が真剣に行います演武は、心身一如で行う我が国の伝統的な文化の結晶であります。我々は、この貴重な文化を風化させ喪失することなく次世代に正しく伝えていく責任があり、本日は、その責務を果たす絶好の機会があります。ご高覧の皆様にとりまして日本の伝統文化と古武道の関係を見出す機会となれば幸甚であります。

最後になりますが、今日の大会の盛況は名古屋市、並びに名古屋市緑政土木局の多大なるご後援とご尽力、そして各流派の先生方と古武道を暖かく支えて下さる皆様のご協力の賜物であると心から感謝申し上げます。

日本古武道振興会
副会長 愛知県支部長

柳生耕一厳信

プログラム

<熱田神宮神楽殿前広場> (10:40~12:10)

1. 小笠原流弓馬術礼法・墓目の儀及び、百々手式 (流祖) 小笠原長清

小笠原清忠	小笠原清基	今村 祝
今村はつ代	村田幸一	安藤ひろ美
兼松邦夫	兼松正子	中島幸子
福留裕晃	和田大地	伊藤 宏
須名和夫	九里孝義	武藤都代美
稲垣雅男	猪谷崇明	長谷川安成
山下佐智子	長澤潔子	中尾淑子
林 貴子	鈴木五十鈴	安藤十九二
水野 稔	梅田克一	稲川幸三
柏木 功	星野卓司	関根 崇
峯 茂康	鈴木浩一	八田 英明
宮崎里美	小川奈美	林 厚成
佐藤昌二	西 能成	森 優史
浅野邦仁	竹内初重	宮下克美
棚橋美喜子	星野達郎	星野真理子
塩谷行庸	伊賀直樹	加納康行
服部昭利	寺尾咲季	

<熱田神宮文化殿講堂> (10:30~15:30)

1. 柳生制剛流抜刀 (流祖) 水早長佐衛門信正
福安實夫 太田俊介 鈴木保幸
ジョシュア ライヤー 玉越薫 高木要馬

2. 合気道 (開祖) 植芝盛平
滝本清三 中山栄一 池田信城
堀江彰 清水寿史 佐藤大輔

3. 鞍馬流剣術 (流祖) 大野将監
柴田章雄 水野正太郎 吉田穰寛
松井康一 渡辺良雄

4. 示現流兵法剣術 (流祖) 東郷藤兵衛肥前守重位
東郷重賢 松窪光裕 下津浩一
徳永重臣 デュルソアンリ 塚本嘉洋
アレキサンダーブラッドショー

5. 天真正伝香取神道流 (流祖) 飯篠長威斎家直
京増重利 櫻井俊也 近藤智紀
吉田典由

6. 立身流 (流祖) 立身三京
加藤紘 栗原実

7. 神道無念流剣術 (流祖) 福井兵右衛門
小川 武 土屋 正 則 相馬 功 一
永見 優 征 浅野 史 明 山谷 怜 子
神明 新 太郎

8. 神道夢想流杖道 (流祖) 夢想権之助勝吉
富田 隆 上川 純 一 鈴木 裕 司
牧野 恭 美 松田 克 也 尾関 俊 輔
尾関 里 乃 杏 名倉 隆 裕

9. 無想神傳流抜刀術 (流祖) 林崎甚助重信
小川 武 萩崎 昭 城崎 建 太郎
山谷 怜 子 神明 新 太郎

10. 双水執流小具足腰之廻組討 (流祖) 二神半之助正聰
宇佐 美 裕 司 舍利 弗 秀 雄 矢部 真 弘

11. 宝蔵院流高田派槍術 (流祖) 宝蔵院覚禅房法印胤栄
船谷 哲 司 植木 昭 登 粟飯原 篤 史
服部 順

12. 小笠原流弓馬術礼法・騎射の型 (流祖) 小笠原 長 清
武藤 都 代 美 佐保 川 誠 中山 隆 夫
鈴木 浩 一 和田 大 地 猪谷 崇 明

13. 天道流なぎなた (流祖) 斎藤判官伝鬼房勝秀
渥美 メ 代 岡本 教 子 加藤 寛 子
滝口 眞 澄 武山 敦 子 宮田 尚 美
横山 恵 美 子 若原 貞 子

14. 無雙神傳英信流拔刀兵法 (流祖) 林崎甚助重信
森本邦生 林大介 鈴木亨昇
松田淳至 原田淑子 元田麻紀

15. 尾張貫流槍術 (流祖) 津田權之丞信之
柳生新陰流兵法 (流祖) 柳生兵庫助利藏
下村幸裕 神原会弥 木村凌弥
石田理永 森治樹 宇治川桂子
川上諒 遠山拓也 小山結宇輝

16. 澁川一流柔術 (流祖) 首藤藏之進満時
森本邦生 林大介 鈴木亨昇
松田淳至 原田淑子 元田麻紀

17. 柳生心眼流體術 (流祖) 荒木又右衛門吉村
梶塚靖司 寺久保敦也 藤澤勝也

18. 神道夢想流杖術及併伝武術 (流祖) 夢想權之助勝吉
石丸聖也 浅野薰 古村正偉
松坂康市 川尻千明 今井博

19. 新陰流居合術 (流祖) 柳生但馬守平宗藏
鹿嶋清治 樋江井和之 和田英之

20. 琉球古武術
渡辺俊明 横田秀穂 蒲生義隆
道正泰弘

2 1. 心形刀流劍術 (流祖) 伊庭是水軒秀明

小林 強 伊東 大輔 小崎 真也
野 仲 治 行

2 2. 関口流抜刀術 (流祖) 関口八郎左衛門源實親

德井 哲夫 坂下 忠國 山際 英人
市岡 徹也 稲垣 幸男 大島 佑斗

2 3. 柳生新陰流兵法 (流祖) 上泉伊勢守藤原信綱

柳生 耕一 巖 信 細井 和子 高山 潤一
鈴木 泰充 小川 友之 柴田 幸芳
加藤 成年 齋藤 智美

流派紹介

(あいうえお順で掲載：流儀名は、日本古武道振興会流儀解説書に準拠)

1. 合気道 (開祖) 植芝 盛平

合気道は、開祖植芝盛平翁(1883～1969)が日本伝統の武術の奥義を究め、さらに厳しい精神的修行を経て創始した現代武道である。合気道は相手といたずらに力で争わない。入身と転換のからださば体捌きから生れる技によって、お互いに切磋琢磨し合って稽古を積み重ね、心身の錬成を図るのを目的としている。合気道は他人と優劣を競うことをしないため、試合を行わない。お互いを尊重するという姿勢を貫く合気道はいのちの大切さがうたわれる現代に相応しい武道といえるだろう。合気道が「和」の武道といわれるゆえん所以もここにある。

2. 小笠原流弓馬術礼法・ひきめ墓目の儀及び、百々手式 (流祖) 小笠原 長清

小笠原氏は、其祖新羅三郎義光に出る。義光の曾孫加賀見二郎遠光射術に長じ、高倉天皇承安年中に勅を奉じて紫宸殿の怪を払い王家の家紋を賜う。其子左京太夫長清始めて小笠原氏を称し、小倉、唐津両家の祖となる。長清三代伊豆守清経別に一家を創る。是当家の祖なり、爾来両家射術をもって鎌倉幕府に並仕す。後、子孫継承し、足利、徳川の将軍に仕え弓馬礼法の道を伝う。当家歩射伝承には鳴弦、墓目を始め百々手式、大的式、草鹿等多く、特に鳴弦、墓目は公開の席上で行うことはなかった。

3. 小笠原流弓馬術礼法・騎射の型 (流祖) 小笠原 長清

騎射とは騎乗して弓矢を射る事を意味し、騎射が時代と共に儀式化され、五穀豊穰の祈願、魔除の祈願などに催し、代表的なものに流鏝馬(やぶさめ)が行われた。流鏝馬は、記録によると平安時代のもが一番古いが、実際にはもっと溯って行われていたと思われる。全国の神社では、古くから競馬(くらべうま)、流鏝馬などの祭事が行われており、また古書にも、犬追物(いぬおいもの)、笠懸(かさがけ)、など武士が武技を練った馬術とは別に、宮廷や神前で行われた流鏝馬の文献もみられる。神事として、発達、洗練されて来た事も周知の通りである。的中により、年占をしたり中りの御守護として、頂く事も一般的になっている。

源頼朝が鶴岡八幡宮の祭礼に流鏝馬を奉納して、特に天下泰平・国家安泰の祈願を籠めたものには、古い歴史と、神事としての深い理由があったのである。

流鏝馬射手の服装は、古来「あげ装束」と云われ、儀礼化された鎌倉武士の狩装束として伝わる。頭に引立烏帽子、綾藁笠(あやいがさ)を冠る。鎧直垂、射籠手(いごて)、夏鹿毛の行膝(むかばき)を付け、太刀を佩き腰刀を差す。背に箆を負い、鏝矢に雁又(かりまた)の付いた矢を盛る。鞭をつけ、弓を握る。足は物射沓(ものいぐつ)をはく。

騎射挟物(きしゃはさみもの)は、流鏝馬を簡素化された式で、徳川吉宗が創案された。射手の服装は、筒袖の着物に袴(免許の後、小袴)をつけ、射籠手を差し黒足袋をはく。

4. 尾張貫流槍術 (流祖) 津田権之丞信之 (春風館道場)
柳生新陰流兵法 (流祖) 柳生兵庫之助利敵

貫流槍術は尾張のみに伝えられた流儀である。貫流の祖は津田権之丞信之で、先祖は平家織田氏の一族である。役を退いた後一分(いっけい)と号した。尾張藩馬廻役千石津田太郎左エ門知信の次子として生まれ、幼き頃より槍術を好み伊東流管槍を虎尾三安の門人森勘兵衛に学んだ。勘兵衛の尾張退去後も更に佐分利円右衛門忠村を師とし、寛文10年5月15日16歳にしてその奥伝を学び取り、後も朝鍛夕練ある日豁然としてその大道を悟り、横手長矩心理一貫の極意を自得し、管に活気の妙あることを知り、新しく派を建て、貫流と称した。世にこれを津田流あるいは、津田貫流ともいい、元祖5年槍奉公となり三百石を賜った。藩主徳川吉通はことのほか熱心で、他藩に伝えることを禁じたことから御止流とも言われた。

これは別名試合勢法とも云い、柳生流補佐役長岡桃嶺子先哲の教えを受け、八勢法を始めとする八本のかたに始まり、表六十一勢法、前に三勢法、併せて六十四本、後の雷刀三十一本、外の雷刀三十一本、その他小太刀、二刀のかたなど劔に関するかた計百数十本、その他やり、なぎなた等に関するもの二十数本、試合がたの基準として伝えられたものである。

5. 鹿島新當流劔術 (流祖) 国摩真人及び塚原ト伝

日本の武道発祥地として鹿島は香取と共に古い歴史と道統を有している。今から約千六百年前、鹿島神宮大行事大鹿島命の後裔国摩真人が鹿島神宮境内に神壇を築き、祈願熱捧を捧げて神託を受け、武饗槌神の神劔「節霊劔」の法則である神妙劔の位を授かり、以後「鹿島の太刀」と称して大行事座主職ト部吉川家を中心に継承されていた。後、鹿島の太刀は上古流・中古流と発展的に呼称され、また「鹿島七流」といわれるほど隆盛を極めた。一四八九年、ト部覚賢の次男に生まれ、後塚原土佐守安幹の養子となった塚原ト傳高幹は実父から「鹿島中古流」を、養父からは「香取神道流」を学び、また武者修行による修練を重ね、かつ鹿島神宮に一千日の参籠祈願をして「心新たに事に当れ」との神示を受けるとともに鹿島の太刀の極意を悟り、流派名を「鹿島新當流」と改め、生家ト部吉川家に継承され今日に及んでいる。

甲冑武道を基礎として想定された実戦的古武道である。身は深く与え、太刀は浅く残して心はいつも懸りにて在りと伝えられてきた。甲冑の弱点とされる小手・喉・頸動脈・上帯通し等を突き、切ることで相手を制する。

6. 鞍馬流劔術 (流祖) 大野 将監

京都の鞍馬山には、源義経が、鬼一法眼に就いて修行し、超人的な腕前に達した、との言い伝えがある。鬼一法眼は義経の他、鞍馬の八人の僧兵へ武術を伝えており、これが鞍馬八流、または京八流と呼ばれているが、確かなことはわかっていない。流祖の大野将監(天正年間の人)が何人について修業し、この刀法を編み出したかは戦災により秘伝書焼失のため不明である。鞍馬と名のつく流派は劔・槍・棒・抜刀などいくつかあったが、劔術では将監鞍馬流だけとなってしまった。

将監鞍馬流は、天正年間に大野将監によって創始され、林崎甚助、加藤玄蕃、幕末から明治にかけて、十四代金子助三郎、十五代宗家を継いだ柴田衛守が流派の中興の祖といわれている。柴田衛守は直参旗本出身で、東京四谷に習成館道場（勝海舟命名、一八七九年創設）を開いて門人を育てる。大日本武徳会剣道範士、警視庁剣道主席師範をつとめる。衛守の子勸（警視庁、貴衆両院剣道師範）と受け継がれたが、昭和二十年の戦災で習成館道場は焼失し、鞍馬流の秘伝書、古文書、武具など全て灰となってしまったのは誠に惜しい極みである。その後勸の子十七代鐵雄により道場は再興され、現在は鐵雄の子章雄が十八代宗家として鞍馬流と、東京にある個人の剣道場では一番古い剣道場習成館を継承している。

鞍馬流の木刀の形は、蛤刃の太い木太刀を使って行い、気迫に富んだ発声をもって演武するのが特徴である。形は七本ありその名称は、正當劍、閃電、燕飛、青眼、変化、気相、水車である。五本目の変化は、「警視流木太刀の形」の二本目に採用されている捲き落とし技で、現代剣道においても大いに活用されている。鞍馬流居合は五本あり、その名称は一文字、胸之位、戻り打、上段、地摺である。

7. 示現流兵法剣術 (流祖) 東郷藤兵衛肥前守重位

蜻蛉とんぼと呼ばれる独特の構えから激しい気合とともに打ち下ろされる太刀筋で知られる示現流は、「一の太刀を疑わず、二の太刀は負け」の教え通り最初の一太刀にすべてをかける薩摩独特の兵法で、流祖は東郷藤兵衛肥前守重位。

重位は始めタイ捨流しりを学び二十数歳で極意に達したが、天正十六年（一五八八年）、島津家十六代当主島津義久公に従って上洛した際、天真正自顕流の蘊奥を極めその剣を秘していた京都萬松山天寧寺てんねいじ ぜんきちの善吉和尚と邂逅、強いて教を請い修業すること半年有余、秘訣の全てをうけ奥義を極めた時が二十八歳であった。

重位は薩摩に帰ってからよく秘訣を守り、自宅で立木・生木を相手とし屋敷内全部の木を打ち枯らして心技を練ること三年、タイ捨流と天真正自顕流の精髓を綜合渾和して編み出したのが示現流である。

重位は、初代薩摩藩主（島津家十八代当主）家久公により一六〇四年藩の剣術師範役を命ぜられ、以後歴代の藩主も示現流を奨励した。流儀名は、薩摩藩学僧南浦文之なんぼぶんしにより仏教経典の一節「示現神通力」より引用「示現流しげんりゅう」と正式に命名された。十代藩主斉興（二十七代津島家当主）の代に「御流儀示現流兵法」と称するよう命ぜられ門外不出とされた。

創流以来四百三十年、当初そのままの姿で一子相伝され、歴代の古文書（鹿児島県指定有形文化財東郷家古文書）と共に、現在十三代東郷重賢しげたかに伝承されている。

8. 澁川一流柔術 (流祖) 首藤藏之進満時

澁川一流柔術しぶかわいちりゅうじゅうじゆつの流祖 首藤藏之進満時しゅうとうくらのしんみつときは、彼の叔父で宇和島藩浪人と伝えられる宮崎儀右衛門満義に連れられて広島藩安芸郡坂村に居住した。藏之進は宮崎儀右衛門を師として澁川流お

よび難波一甫流を習得し、さらに武者修行の途上、浅山一伝流をも習得して三流をもとに「澁川一流柔術」を創始した。

首藤は天保十年ころ松山藩に仕えることになったと伝えられている。この後、松山藩では首藤蔵之進は小玉平六と名乗り、松山においても澁川一流柔術の教授をおこなった。明治維新以降は親族のいる広島県安芸郡坂村にたびたび帰り、広島入門にも澁川一流柔術を伝え残し、明治三十年、八十九歳で松山において没した。

澁川一流柔術の体系は素手や刃物による仕掛けに素手で応じる形と棒術（互棒・小棒・三尺棒・六尺棒）、十手術、分童術、鎖鎌術、居合術などの得物を用いる形から成り立っている。形は約四百あり、その特徴はすべての形に飾り気がなく、素朴で単純な動きで相手を制するところにある。

9. 新陰流居合術 (流祖) 柳生但馬守平宗厳 精勇館道場

永禄・慶長の頃、水早長左衛門信正という豪族が、制剛という僧から柔術の極意を受け、又居合にも通じていた。弟子の梶原源左衛門直景は師信正の極意を承継し、制剛流柔術と居合を以て尾張大納言義直公に仕えた。制剛流八世で新陰流師範補佐でもある、長岡惣三郎房成が制剛流居合を大成し、「柳生制剛流居合術相伝書」を残した。この相伝書が柳生家に伝わり、柳生厳長師により、新陰流の刀法の術理により、練り直され完成された。

柳生厳長師は昭和6年2月14日名古屋第3師団剣道競技大会で「新陰流居合」の流名で演武されている。この年に先代精勇館々長・鹿嶋清孝師は柳生厳長師に師事する。

昭和11年3月、鹿嶋清孝師は免許皆伝を許される。免許の見出しは「柳生流兵法抜刀」となっており、「伝来」には「流祖、柳生但馬守平宗厳」、以下代々の柳生家の道統が記載されている。

昭和13年7月17日鹿嶋清孝師は「精勇館道場」を建設し、柳生厳長師を招き居合の教授をお願いした。その際柳生厳長師は「これが本当の新陰流の居合」と、言われた。鹿嶋清孝師はこれにより「新陰流居合術」と、称することになった。

戦後間もない昭和20年秋、名古屋駐留米軍指令部から「柳生流を見たい」と米軍将校が精勇館に来た。鹿嶋清孝師は柳生厳長師と栗本信三師と共に米軍指令部で「新陰流居合・新陰流兵法」を演武し、「神業である」との喝采を得た。その場で軍属2名が精勇館に入門し、指導したが、その際「剣道はもとより居合も個人で稽古することは差支えない」との確証を得た。これにより精勇館では、戦後の混乱期にも「新陰流居合術」の名称で稽古を続けた。

鹿嶋清孝師は戦前は大日本武徳会京都大会、戦後は全日本剣道連盟京都大会で演武し「新陰流居合」を全国に広めた功績は大きい。昭和37年には「名古屋まつり協賛日本古武道大会」を鹿嶋清孝師が主唱し、市会議員の宮田一雄氏、弓道家の富田剛一氏の協力を得て開催し、現在に至っている。

現在精勇館々長に鹿嶋清治氏が当り、門人相寄り、柳生厳長師、鹿嶋清孝師の居合を正しく承継している。

10. 心形刀流剣術 (開祖) 伊庭是水軒秀明

心形刀流は江戸時代初期、伊庭是水軒秀明が開祖した流派である。八代伊庭軍兵衛秀業は江戸下谷に道場を開き、当時北辰一刀流千葉周作、神道無念流斎藤弥九郎、鏡新明智流桃井春蔵らと共に、江戸四大道場と称せられた。九代伊庭軍兵衛秀俊が幕府講武所師範役に出仕したことで全国に広まり、心形刀流を採用した藩は多くあった。なお伊庭八郎の幕末動乱の際の豪男ぶりは大変有名であるが函館五稜郭の戦いにおいて27歳で戦死した。

亀山藩士山崎雪柳軒は八代秀業に師事した。免許皆伝の後、亀山に帰り元治2年道場を建て、亀山演武場と称して心形刀流を修業、また門下の指導にも当たった。廃藩後、同流儀が廃絶していく中、心形刀流は亀山でのみ今日まで伝承され昭和50年三重県無形文化財(第1号)に指定された。なお星霜に耐えた幕末の道場は昭和60年1月焼失したが、同63年に復元落成している。

心形刀流は心の修養を第一義とし、技の錬磨を第二義とする。すなわち技は形であり、心によって使うものである。心正しければ技正しく、心の修養足らざれば技乱れる。この技が刀の上に具現され流名の心形刀流となる。

11. 神道夢想流杖術及併伝武術 (流祖) 夢想権之助勝吉

木曾の住人夢想権之助は香取神道流剣術(流祖・飯篠山城守家直)を学び、奥義を極め、更に鹿島新当流(流祖・松本備前守)を学ぶ後、筑前の竈戸神社に参籠のとき、「丸木を以って水月を知れ」と云う神示を賜り夢想流をあみだしたと云われる。杖は直径八分(2.4cm)長さ四尺二寸一分(128cm)の丸木であるが、操作次第で突き、払い、打ちを主体に右に応じ左に変じ千変万化し、敵をして対応にいとまなからしむることが特徴である。突けば槍、払えば薙刀、持たば太刀、杖はかくにもはずれざりけり。その指導原理は同流伝書の「傷つけず人をこらして戒むる、教えは杖の外にやはある」とある如く、あくまで平和の中に偉大な武の徳を顕現するところにある。形は表業、中段、乱合、影、奥伝、秘伝等六十四が示される。

黒田藩の杖は武所として代々相継。杖術、一心流鎖鎌術、一角流十手術、一達流捕縄術、中流鉄扇術等だが、通常前三流を公表している。

12. 神道夢想流杖道 (流祖) 夢想権之助勝吉

神道夢想流杖の開祖、夢想権之助勝吉は慶長年間(約400年前)の人と伝えられ香取神道流武術の祖、飯篠山城守家直の門に入り香取神道流の奥義を究めその免許を受け、さらに鹿島神流の極意「一の太刀」を授かったと伝えられる。

そのころ夢想権之助は多くの剣客と試合をし敗れたことはなかったが、時代を同じくする剣豪宮本武蔵との試合で十字留にかかり敗れた。

それ以来、夢想権之助は武蔵の十字留を敗らんと、筑前の国(福岡県筑紫郡)に至り、大宰府天満宮神域に連なる霊峯宝満山に登り玉依姫を祀る竈戸神社に祈願参籠、満願の夜、夢の中

に童子が現れ「丸木をもって水月を知れ」とのご神託をもとに四尺二寸一分、直径八分の杖を用い、これに槍、薙刀、太刀の三つの武術を総合した神道夢想流杖を編み出し、再度、宮本武蔵に試合を挑み見事十字留を敗ったと伝えられている。

その後、神道夢想流杖は福岡黒田藩に用いられ十数人の師範家を起し盛大に指南され、特に藩外不出のお留め武術として四百年來伝えられて来たものである。

近年において神道夢想流杖は実戦的かつ実用的な卓越した武術と高い評価をうけ、第二次世界大戦前においては著名な剣道家、柔道家、海洋少年団、満州国全土の青少年訓練に用いられ、戦後には警視庁機動隊、大阪府警機動隊においても警杖と呼称、採用され、現在では各種団体、企業、大学におけるクラブ活動など全国で普及活動が行われており、特に海外における杖道愛好者の増加は眼を見張るものがある。

神道夢想流杖の伝承とその普及を目的とした愛杖会は、愛知県において早くから神道夢想流杖の普及と武道を通じて青少年の育成等に貢献、活躍された故濱地光一師範（昭和60年没）の杖に対する心とその精神を引継ぎ活動している。

13. 神道無念流剣術 (流祖) 福井兵右衛門

流祖・福井兵右衛門嘉平は元禄十三年下野国に生まれ、はじめ一円流の師野中権内について修業し、技心大いに衆に抜きんでて諸国武者修業に励み、信州戸隠の飯綱権現に立ち寄って参籠、祈願すること五十日に及び、ついに剣の奥義を悟り、神道無念流を創始したといわれる。

その後、江戸四谷に道場を開き、門弟の育成と流派の発展に努力したが、神道無念流が広く世間に知られるようになったのは戸賀崎熊太郎暉芳からである。暉芳は延享元年武州清久村の生まれで、十五歳のときに江戸に出て嘉平に師事し、入門六年後、弱冠二十一歳で免許を得た。

のち、岡田十松や斉藤弥九郎などの剣客がこの門から出るに及んで一層隆盛を極め、とくに斉藤弥九郎は、北辰一刀流の千葉周作、鏡心明智流の桃井春蔵と並び幕末三剣豪といわれた。門下には江川太郎左衛門、藤田東湖、桂小五郎、品川弥二郎、秋山要助、仏生寺弥助ら錚々たる剣客や人物が輩出した。明治以降、根岸信五郎、中山博道によって受け継がれた。

14. 関口流抜刀術 (流祖) 関口八郎左衛門源實親

流祖は、江戸時代初期の人で紀州藩士である。関口流柔術の開祖である関口柔心の長男として生まれ、父より刀・槍・柔術などを習い、豪勇であった。承応三年紀州藩を辞して諸国修行の旅に出、後、江戸の芝浜松町に道場を開いた。延宝元年紀州藩に帰参し、頼宣公に仕え、五百五拾石を給せられている。江戸の道場には、信州松代藩主眞田伊豆守はじめ、諸国の藩士が多数入門して、関口流は全国に伝播し、多くの系統に分かれた。

私どもの流儀は、流祖の高弟で渋川流柔術を立てた二代渋川伴五郎義方に江戸で学んだ、熊本藩士井澤十郎左衛門長秀によって肥後に伝えられ、一名肥後流とも称するものである。長秀は、山崎闇斎の門人で、神道、国典に精しく、また漢学に通じ、「武士訓」等著書多く、文武

両道の人であった。帰国後、長秀は秀れた抜刀術を認められて居合師役に任ぜられ、以来道統は連綿と今日に及んでいる。

当地方には、二天一流第八代宗家で十四代青木規矩男の台湾時代に学んだ十五代亀谷鎮により伝えられ、貫流槍術第八代宗家でもある十六代高木和雄を経て、十七代宮寄勇夫より、十八代徳井哲夫・祖父江光紀へと継承されている。

身長より三尺引いたやや長い刀を用いるため、鋭く引鞘をして抜刀し、大声に気合をかけながら飛違って、全体重を刀にかけて斬る激しい刀法が特色である。

業は坐業の居合十一本、小太刀五本、立業の歩合五本、袖抜三本、その他に懐剣三本、太刀抜三本、介錯の太刀、大太刀抜を伝えている。

15. そうすいりゅうこくそくこしのまわしくみうち 双水執流小具足腰之廻組討 (流祖) ふたがみはんのすけまさあき 二神半之助正聴

双水執流は甲冑武術(小具足)の伝統を色濃く残す、よるいくみうち 鎧組討(柔術)と腰之廻こしのまわし(居合抜刀術)の技を伝承する流儀である。

流祖二神半之助正聴は豊後国竹田藩の人である。戦国時代末期、竹内流小具足腰之廻を学び、後に創意工夫を加えて一流を興し二神流と称した。しかるに必勝の術全からざるを悩み、普く諸国を巡り修行し、大和国吉野山の深谷に三十七日間籠もり、諸流の奥秘中より善悪を取捨して、遂に必勝の理を極めた。吉野川の清き流れを見て、その行く水の滞らず速やかなるに心を止め、益々己の心胆を錬磨するとともに、大いに刻苦工夫し、事理無礙なるを大悟して、二神流を改め双水執流と称した。承応年間のことと伝わる。筑前の黒田藩に伝えられ、江戸時代を通じ代々継承されてきた。

元治元年に福岡に生まれた松井百太郎は、幼少より叔父の松井幸吉に双水執流を学んだが、明治十年三月第十三代舌間忘多宗綱に入門して修行に励み、「心源の巻相伝」(宗家資格に相当)を許された。松井百太郎は明治二十一年上京して一條候爵邸内に道場尚武館を設立し、一條候、黒田候の子弟及び旧黒田藩士に双水執流を指導すると共に、警視庁柔術世話係(柔術師範)を二十五年にわたってつとめ、全国に双水執流を知らしめた。昭和二年には大日本武徳会より範士称号が授与されている。

16. 竹内流腰廻小具足 (流祖) 竹内中務大輔源朝臣久盛

流祖竹内中務大輔源朝臣久盛は、清和源氏経基王より十五代の後裔従三位竹内大膳大夫豊治の長子播磨守幸治の子で、美作国埴和郷一の瀬城主である。

幼児より勇壯で剣を好み長ずるに従い、その道に通ずるといえども未だ足らざると悟り、愛宕神を信じ作州埴和郷三の宮に参籠し、日に三度斎浴して武神に祈願し、二尺四寸の木刀を以って大樹を打ち技を練ること六日六夜、忽然と武神現われ兵法の一術を示そうと彼の木刀をとり長きに益なしと之を二つに切って、小太刀とし、小具足と命名し、その奥義を授かり、又かざらをとって武者搦を授かり之を迅繩と称えた。

以来竹内流捕手腰廻り小具足組討と号して、その業が妙域に達した。時に天文元年6月24日の事であり、竹内流が始めて世に行われるようになった。

当流は柔術の草分けである。

二代目常陸介久勝、三代目加賀介久吉共に近衛、鷹司関白よりそれぞれ日下捕手開山の御綸旨を賜わり、全国武者修業に於ける真剣勝負を流儀に補い親子孫三代に渡っての洗練された流儀である。竹内藤一郎源久宗氏は、宗家十四代目師範であり、現在岡山県御津郡建部町角石谷に、当時の道場が現存し指導に当たっている。

17. 立身流 (流祖) 立身三京

流祖立身三京^{たつみさんきょう}は足利時代、伊豫の国の武将で、幼少より武術に精進し、幾多の勝負に勝ち抜いたが、技法を超えた高度の心法を極めんとして、妻山大明神に祈願して大悟し、勝機を未撃に知る無我の心境に達し、必勝の原理を体得し、立身流を創始した。江戸時代は下総佐倉の堀田藩で、武士教育の中核として重視され、権威ある宗家統率のもとに、非凡な剣士に厳しく伝承され、伝書十五巻や古文書と共に、正確に現在まで伝えられた。幕末頃には半澤成恒・逸見宗助・兼松直簾らの名人が出た。

警視流の形には、立身流から剣術に「巻落」、居合に「四方」、柔術には「柄搦み」及び早繩に各一本宛採用された。豊前中津の奥平藩に立身流の分派立身新流があつて、福澤諭吉はこれを学び、晩年まで自負したのは有名である。

特徴として、居合、剣術を主軸とし、仰、槍、棒、半棒、長刀、捕縄、手裏剣、さらに弓、物見などの心得、首見参などの作法や集団戦闘法などを含めた総合武術である。向、圓の二本が基本にして極意の形であり、これが千変万化する。

昭和41年 千葉県佐倉市無形文化財指定

昭和53年 千葉県無形文化財に指定替

現保持者 第22代宗家 加藤 紘 (昭和60年追加認定)

18. 天真正伝香取神道流 (流祖) 飯篠長威斎家直

「天真正伝香取神道流」は飯篠長威斎家直を流祖として、下総の国香取の地に伝承する武術である。家直公は六十余歳にして香取大神に壺千日の大願をたて齋戒沐浴、兵法に励み百鍊千鍛を重ね粉骨の修行の後、香取大神より神書一卷を授けられたと伝えられ、その後、連綿と続き、現在宗家二十代目飯篠快貞に至っている。

その間、有名な門流には上泉伊勢守、塚原土佐守及びト傳、松本備前守、諸岡一羽斎、秀吉の軍師竹中半兵衛、奥州仙台家老片倉小十郎(白石城主)、幕府旗本には中台信太郎、松本直一郎、伊庭軍兵衛ら、また諸藩の代々指南家等々枚挙にいとまがない。

なお当流には剣術、居合術、柔術、棒術、槍術、薙刀術をはじめ奥には軍配法、築城法に至る総合武術として、古来軍学者や武術家たちが学んだ兵法から入り、平法に至るまでの修行法が残されている。

19. 天神真楊流柔術 (流祖) 磯又右衛門柳関斎源正足

流祖は紀州藩士、磯又右衛門柳関斎源正足(文久3年・1863年没)伊勢松坂生まれ。楊心流、真之神道流を修行し、奥義を極める。京都北野天満宮に参籠し楊柳の風になびく様(柔軟性)を觀て大悟し「天神」と、これまでに修行してきた二流の文字「真」と「楊」を合わせて天神真楊流と名付けた。江戸神田お玉ヶ池に道場を開き、門人が5千余りを数え百二十四本の手数及び活殺の秘術を伝授した。講道館柔道の創始者嘉納治五郎師範は明治10年に師範家、福田八之助の門に入り修行を始める。明治12年師の死去にあい、三世磯石衛門源正智について修行を続け、その理合いや技を応用し明治15年講道館柔道を創始した。

柔軟な身体をもって相手の氣力に逆らわず、変化に応じ相手を崩し制する。投技、関節技、絞技の多くが講道館柔道の基盤となっている。また実戦における複数の相手に対応する真の当(生理的弱点を突く・蹴る)を技法の中で活用している。活法及び接骨技法に於いては、近代の柔道整復術に多大なる影響を与えている。

20. 天道流なぎなた (流祖) 斎藤半宮伝鬼房勝秀

天道流は今から約450年前、常陸の国(現在の茨城県)に生まれた斎藤半宮伝鬼房勝秀はんかんでんきぼうかつひでによって創始されたものであります。

伝鬼房は、塚原卜伝つかはらぼくでんの門に入り、刀槍の術を学び自己の技の未熟を心に感じ、天正9年、鶴ヶ丘八幡宮に百日の参籠さんろうをし、誠の道に叶う劍の技を得て一流を興して天流と称し、後に天道流と改められ多くの門弟に誠の心と技を伝えました。

諸国修業をおえて郷里かすみしんとうりゆうに帰り霞神道流の櫻井大隅守との決闘の際に示した矢切の術を「一文字の乱みだれ」といい流儀の基本になっております。

現在、薙刀にとう・二刀・杖・劍・鎖鎌・小太刀等の技が伝承されています。流儀の特徴は形試合であって、形そのものが即ち真劍試合であることです。

現在第17代宗家 木村恭子先生やすこが継承されております。

21. 宝蔵院流高田派槍術 (流祖) 宝蔵院覺禅房法印胤栄

流祖 宝蔵院覺禅房法印胤栄ほうぞういんかくぜんぼうほういんいんえい(1521~1607)は南都興福寺の僧。武芸を好み槍の修練に努め、猿沢池に浮かぶ三日月を突き鎌(十文字)槍を工夫し、ついに天文二十二(1553)年正月十二日弘暁、摩利支天の化身、成田大膳太夫盛忠から二箇の奥儀を授けられ、宝蔵院流槍術を創めるに至った。さらに、柳生但馬守宗厳と共に上泉伊勢守秀綱から刀術を学び宝蔵院流槍術を大成させた。

そして後日、高弟中村尚政にその正統を伝え、さらに尚政からその妙術を承継したのが高田又兵衛吉次。高田又兵衛は後に小倉藩に移り、以後子孫代々これを相続した。

宝蔵院流の槍は、通常の素槍すやりに対し鎌槍かまやりと称する十文字形の穂先に特徴があります。この鎌槍は攻防に優れ画期的な武器として「突けば槍 薙げば薙刀 引けば鎌 とにもかくにも外れあらず」との歌が伝えられるように、江戸時代を通して全国を風靡し、日本を代表する最大の槍術流派として発展した。

22. 無雙神傳英信流拔刀兵法 (流祖) 林崎甚助重信

無雙神傳英信流拔刀兵法は戦国時代末期の人、林崎甚助重信を流祖とする。江戸時代に入り長谷川英信に学んだ荒井信定は山内家家臣、土佐藩士林守政にこれを伝えた。

林守政は延宝5年(1677)、15歳の時に江戸への供を仰せつかり、江戸で荒井信定から諸武芸を学んだが、土佐に帰った後、武術は居合を教授し、土佐藩で伝承されることとなった。また林守政は、新陰流の剣術の師である大森六郎左衛門に大森流の居合をも習い、これを併伝した。

幕末に至り山川久蔵は文政3年(1820)土佐藩の居合教授における最高の地位である居合指南役となり、山川の没後はその弟子、下村茂市が居合指南役となり明治維新に至るまで無雙神傳英信流拔刀兵法を教授した。下村茂市を師とし大正まで無雙神傳英信流を伝えたのが土佐の自由民権運動の重鎮である細川義昌であった。細川は大日本武徳会高知支部常議員として居合の指導を行い、香川県の植田平太郎に免許皆伝を受け、その業が現在まで受け継がれている。

無雙神傳英信流の形は正座から行う大森流、立膝から行う英信流表、立膝と立技からなる奥剣術的技法である太刀打、剣術と居合の中間的な技法である詰合、柔術的技法である大小詰・大小立詰から構成されている。

23. 無想神傳流拔刀術 (流祖) 林崎甚助重信

林崎甚助重信は、今から四百数十余年前、出羽山形の楯岡に生まれ、弘治2年に父の仇討ちを祈願して林崎明神に参籠、ついに満願の日に神託を得て鞘の内の妙意を悟得し、後年、本懐を遂げている。その後、諸国武者修行を経て神明夢想流、神夢想林崎流、重信流等と称し本邦居合の始祖となった。代々の門下には、田宮平兵衛、長野無楽斎、長谷川主税助英信等多くの名人、達人を輩出した。

中山博道先生は、明治末期、土佐の板垣退助の紹介により下村派の達人であった細川義昌に入門し、それまで県外不出であった無雙神傳英信流(大森流、長谷川英信流、林崎流等)を学び、谷村派の森本兎久身にも良く指導を受けて、大正11年に免許皆伝となって道統を受け継ぐ。そして、これまでの修行鍛錬の成果を集大成し、昭和8年2月の東京本郷の有信館本部道場の式、続いて同年5月の第37回武道祭大演武会において無想神傳流拔刀術の流名を公表した。

博道先生の居合術及び据物斬りは当代無双、天下の神品であり、幾多の天覧に供した。居合において大切なことは仮想の相手を常に考えることであり、小さく抜いて大きく見せる、大きく抜いて小さく見せる、この意味が自分で解るように努力するのが最高の目標であると云われる。

24. 柳生新陰流兵法 (流祖) 上泉伊勢守藤原信綱

戦国末期、上州の住人、上泉伊勢守藤原信綱は刀・槍の術にすぐれ、若くして諸流に達し、特に愛洲日向守移香斎の陰流の奥旨を究め、その中から「転」(まろばし)を工夫発明して、新陰流を創始した。その後永禄8年、信綱は「無刀の位」を開悟した大和の住人、柳生石舟斎宗徹に印可相伝をなし、これを正統二世とした。宗徹の五男宗矩は徳川家康に仕え、將軍秀忠、家光の兵法師範となり、大名に列して当流の剣名を天下に広めた。次いで十兵衛三徹、宗冬、宗在、俊方、俊平・・・と伝えたが惜しくも兵法に遠ざかってしまった。一方宗徹は、嫡孫兵庫助利徹の偉才を愛し、膝下に置いて朝鍛夕錬、流祖以来の流儀の玄妙の悉くを伝えた。

慶長10年、宗徹は利徹に印可相伝して、これを正統三世とした。元和元年に利徹は尾張藩主初代徳川義直の知遇を得て、その兵法師範となり名古屋に移住した。利徹及びその子連也徹包は、太平の時勢を迎えたことを明察し、信綱・宗徹以来の教えと刀法を全面的に検討して大改革を断行し、より一層時勢に適応した自由な「直立(つった)つる身の位」を主体とした兵法を確立して当流を大成した。元和6年、利徹は義直公が一流の妙諦を了したるを喜び、道統を伝えて第四世とした。

義直公はその後、利徹の子、連也徹包に正統を譲り、徹包は尾張藩主第二代徳川光友に相伝した。このようにして、当流の道統は尾張柳生家代々の師範と尾張藩主徳川氏のうち兵法に堪能なる方々により伝えられた。

第十九世柳生徹周は尾張侯最後の兵法師範であったが、大正2年、明治天皇の当流保存の御聖旨により、宮内省濟寧館に出仕した。第二十世柳生徹長は、近衛供奉将校団師範に任ぜられた。戦後、昭和30年、柳生会を設立し流祖以来の道業を興した。昭和42年からは、第二十一世柳生延春徹道師範がこれを受け継ぎ、東京・名古屋・大阪を中心に、当流の純正なる弘流と護持に身を挺すると共に日本古武道協会常任理事として、真の古武道の発展に尽力してきたが、平成19年5月に享年88歳で逝去した。その後、第二十二世柳生耕一徹信師範が道統を受け継ぎ今日に至る。

25. 柳生心眼流體術 (流祖) 荒木又右衛門吉村

当流は、柔術、剣術、棒術、居合術等を含む総合武道である。流祖は荒木又右衛門吉村で荒木堂と号し、法祖には柳生十兵衛をいただき、流名の心眼とは、禪家の喝の声を出さず目に現す事としている。当流の修行方法は柔術を中心とし、身体動作、立位進退、腰の据え方、手足の調和などの基本を体得した後、各種武器の修練に入るのを原則としている。

心眼流は元来仙台の発祥で、仙台にもその伝系が継承されているが、二世小山左門は享保3年(1718)仙台に生まれ心眼流を修行、諸国を回遊修行後、江戸浅草にて道場を開き18年にわたって門弟を指南したといわれている。

小山は晩年、郷里に還住したが、その流れは当流江戸系として今日、十世武藤正雄から十一世梶塚靖司宗家に伝承されている。七世大島正照は、新徴組に参加し、勝海舟・山岡徹舟等と交わり、八世星野天知は明治文壇において、文芸雑誌「文学界」の同人として島崎藤村・北村

透谷・樋口一葉等と交わり、明治文化に新風を送り込んだ。また、天知は、明治女学校にて、島崎藤村と共に教壇に立ちつつ女子教養の一助として武芸科を創立し、心眼流を教授している。島崎藤村が恋心を抱いた女性、左藤輔子の名も、その門人帳に見え、明治27年に目録を受けている。合気道の植芝盛平開祖や柔道の産みの親嘉納治五郎氏も青年の折、当流を学ばれている。

26. 柳生制剛流抜刀 (流祖) 水早長左衛門信正

制剛流の流祖水早長左衛門信正から極意を伝えられた梶原源左衛門直景は、その後尾張藩主義直に仕え、制剛流柔術を尾張藩に伝えた。勢州出身の長岡房英師は制剛流抜刀術の奥義を究め、また尾張柳生家の高弟で、兵法補佐に任じた。次代、長岡房成師は、特に新陰流の達人で、古来相伝の制剛流抜刀を大成した。これが柳生家に伝えられ、柳生巖周師及び柳生巖長師により、新陰流の術理に則り全面的に練り直され、柳生制剛流として完成された。現在の柳生耕一巖信師範にそのまま正しく伝承されている。

27. 琉球古武術

琉球武術は、徒手空拳術と武器術の二つから構成される。一般に前者を空手と呼び、後者を琉球古武術と称している。琉球古武術は八種の武器(棒、サイ、トンファー、ヌンチャク、鎌、鉄甲、ティンペー、スルジン)を使用し、武器毎にそれぞれの特色技を含み、琉球武術の要素と技法を奥深く秘蔵している。現在残されている型の大部分は二百年から数百年程以前の父祖達人の足跡である。

琉球古武術が歴史に現れ始めたのは、今から七百年程以前。日本で言えば、鎌倉、南北朝の時代。琉球の按司(あじ)の時代そして南山、中山、北山の三山が割拠し、また統合された百余年の間の戦に使用されたものであり、またそれら武器の使用法であったといわれている。時代を経て17、18、19世紀には添石(そえいし)、佐久川(さくがわ)、北谷屋良(ちやたんやら)等の大家が輩出し、隆盛を極めた。しかし、時代の変遷とともに継承者も徐々に減り、衰微の一途をたどり、ごくわずかな人々によってのみ点々と保存されてきたのである。

こうした状況を憂慮した大正初期の先人達は、空手とともに琉球武術の双璧をなすこの琉球古武術の保存と振興に努力を傾注した。特に、屋比久孟伝師の門下、平信賢師は、昭和15年に保存振興会を創設し、長い年月を経過して伝来した各型を生涯を通じて集大成された。当「琉球古武術保存振興会」は集大成された八種の武器からなる四十二の伝承型ならびにその全型の皆伝を受けた井上元勝が故師の遺命により編制した八種の武器の各使い方、基本組手、分解組手等一連の技術体系とともに正しく保存振興している。特に四十二の伝承型のうち、二十二が棒の型である。それだけ良く研究された含蓄ある棒法であり、琉球古武術の白眉の存在である。型名を「・・・の棍(こん)」という。現在、井上貴勝が宗家・会長としてこれを継承し、東京都に総本部を置く。

道場及び教場所在地 (あいうえお順で掲載)

合気道教場	木田塾道場	海部郡美和町木田字東阿弥陀22	滝本清三
	春日井道場	春日井市鳥居松町(春日井警察署内)	滝本清三
	下原道場	春日井市下原町1748	滝本清三
伊勢神宮外苑弓道場		三重県伊勢市神宮外苑内	
伊勢柳剛流教場	津武道研修会	三重県津市結城会館内	
小笠原礼法・弓術・ 弓馬術教場・31世 宗家教場		神奈川県藤沢市鵠沼海岸2-17-4 http://www.ogasawara-ryu.gr.jp	小笠原清忠
尾張貫流槍術 柳生新陰流兵法	春風館	名古屋市中川区宗円町2-24	加藤伊三男
鹿島新當流剣術	鹿島新當流道場	茨城県鹿嶋市宮中1-3-39	吉川常隆
鞍馬流剣術	習成館道場	東京都新宿区信濃町11-12習成館	柴田章雄
示現流兵法剣術	示現流兵法所史料館	鹿児島市東千石町2-2	東郷重賢
新陰流居合術道場	精勇館	名古屋市中区稻生町7-36	鹿嶋清治
	四日市和道館	三重県四日市市十七軒町60	秋田森治
	東別院洗心道場	名古屋市中区橋町	
	ナオリ会館	名古屋市中区代官町27-5	
心形刀流武芸形	亀山演武場	三重県亀山市本丸町537	元治2年山崎雲流軒 により開場心形刀流の 道場として現在に至る
	代表者宅	三重県亀山市東町1-8-26	小林強

神道夢想流杖術教場	日本武道館	東京都千代田区北の丸2-3	古川 瞬也 椎屋 光男
	滝ノ水道場	名古屋市緑区神沢3-915	石丸 聖也
神道夢想流杖道教場	愛杖会大府教場 清光庵道場 メディアス体育館おおぶ 大府市藤井神社	mhamaji@unicemy.co.jp 大府市桃山町 大府市横根町 大府市追分町	濱地 光男
	愛杖会平田教場 平田コミュニティ センター 春日井武道館	名古屋市西区西原町 http://aijokai.cool.coocan.jp/ 春日井市高山町	富田 隆
	愛杖会名古屋教場	名古屋市緑区松が根台229	池田 真由美
神道無念流剣術 無想神傳流抜刀術	新宿BMTスタジオA	東京都新宿区北新宿1-13-19 弘林ビルB1F shinto.munenryu.yushinkan@gmail.com	城崎 建太郎
	中目黒ブロードウェイ スタジオB15	東京都目黒区上目黒1-5-10 中目黒マンションB15	城崎 建太郎
	さいたま市大宮武道館	埼玉県さいたま市見沼区堀崎町12-36	萩崎 昭
	稔台市民センター	千葉県松戸市稔台7-1-5	土屋 正則
	三鷹第四中学校体育館	東京都三鷹市上連雀4-18-7	中舘 秀光
	中国 広州支部	広東省広州市花都区新華鎮秀全大道2 号展麟 大夏A座1302室 shinto.munenryu.yushinkan@gmail.com http://www.shinto-munenryu.jp/	相馬 功一
関口流抜刀術教場		小牧市光ヶ丘3-40-10	徳井 哲夫

双水執流小具足腰之廻組討	双水執流光尊会本部尚武館西水庵道場	埼玉県大里郡寄居町桜沢618-1番地	宇佐美裕司
	寄居町立総合体育館アタゴ記念館	埼玉県大里郡寄居町寄居1177番地	宇佐美裕司
	尚武館仁王道場	東京都江東区南砂1-17-3	中村清恭
	昌武塾道場	千葉県千葉市花見川区武石町2-609-10	飯高宏
竹内流柔術道場		岡山県御津郡建部町角石谷1125	竹内藤一郎
立身流本部		千葉県千葉市中央区中央4-8-8 日進ビル6階 http://www.tatsumi-ryu.org/	加藤紘
	支部	千葉県佐倉支部 八街支部 市原支部 東京都矢口支部 福島支部 オーストラリア支部 フランス支部 スペイン支部	
天真正伝香取神道流		千葉県香取市香取1827 katori-shintoryu.jp	飯篠快貞
天神真楊流柔術	文京スポーツセンター	東京都文京区大塚3丁目29-2	
	千代田スポーツセンター	東京都千代田区内神田2丁目1-8	
	新宿スポーツセンター	東京都新宿区大久保3丁目5-1	
	東松山武道場	埼玉県東松山市本町1丁目2-21	
	伊予三島運動公園	愛媛県四国中央市中之庄町1665番	
	四国中央市三島東中学校	愛媛県四国中央市中曾根町199番	
	事務局	埼玉県東松山市高坂849-6	渡邊卓也
天道流薙刀道場	愛知県武道館	名古屋市港区丸池町1-1-4	宮田尚美

宝蔵院流高田派槍術	奈良宝蔵院流 槍術保存会	奈良県奈良市敷島町2丁目481-4 一箭事務所内	一箭順三
	ならでん武道場 (奈良市中央武道場)	奈良県奈良市法蓮佐保山4丁目1-2	
	名古屋道場	名古屋市南区桜台2丁目6-13	宮島勝
	東京道場	東京都杉並区高円寺北3-33-17 ピュアマンション301	前田健太郎
	ハンブルグ道場(ドイツ)	Alster Dojo e.V. Veilchenweg 34 22529 Hamburg	ユルゲン・ゼーベック
無雙神傳英信流抜刀兵法 澁川一流柔術	貫汪館【本部】	広島県廿日市市宮内1480 http://kanoukan.jimdofree.com/	森本邦生
	世田谷支部	東京都世田谷区	鈴木厚史
	横浜支部	神奈川県横浜市	内住信之
	名古屋支部	愛知県名古屋市	林大介
	北大阪支部	大阪府吹田市	堂本慎介
	呉中央支部	広島県呉市	三崎俊広
	オーストラリア パース支部		Michael Mackay
	米国 エルパソ支部		Pedro Borrego
	トリニダード・トバゴ支部		John Ramirez
柳生新陰流教場	日本ガイシ スポーツプラザ	名古屋市南区東又兵衛町5-1-16	柳生耕一
	愛知県武道館	名古屋市港区丸池町1-1-4	
	名古屋市天白 スポーツセンター	名古屋市天白区植田3-1502	

正 武 館 道 場 安城市石曾根13
中野区立体育館 東京都中野区中野4丁目
豊中市立武道館 大阪府豊中市武道館、ひびき

柳生心眼流體術教場 栃木黒磯道場 梶塚靖司

事 務 局 神奈川県横浜市栄区 吉岡写真事務所
小菅ヶ谷1-17-11
<http://www.kunpooan.com/arakido.html>

神奈川逗子武藤道場

神奈川大和県央道場

神奈川鎌倉道場

神奈川栄稽古場

埼玉行田道場

広島廿日市道場

東京神楽坂稽古場

琉球古武術 東京都目黒区目黒4-20-2 井上貴勝
保存振興会 <http://www.hi-ho.ne.jp/ryukyu-kbujut/>

蔵 修 館 東京都渋谷区渋谷3-4-7